

# 小金井公園でバッチバチ

ポメオ

## ルイ・アームストロング船長

---

湯船に浸かり右腕を眺めている。

枯れてしまった樹木の枝のようにしなびた右腕。

ルイ・アームストロング。俺のアーム・ストロング。

そんな事を考えていたら突然声がした。

「船長！大変です船長！」

湯船から出てどこから聞こえるのか確かめてみると、洗面台の配水溝の奥の方から聞こえてくるようだ。

あまりに何度も呼びかけがあるので、「何だ！どうした！？」と洗面台の排水溝へ声をかけてみる。

と、その声はぴたりとやんだ。

それからまた湯船に浸かり右腕を眺めた。

枯れてしまった右腕。

しばらくすると排水溝からまた声がした。

「船長！もうダメです！このままじゃ沈没しちゃいます…。」

一体何が沈没するというのか。そして一体全体俺はどうしちゃったんだろうか。

すかさず体を起こし洗面台へ向かった。

「最後まで諦めるなバカヤロウ！最後の最後まであきらめるな！」

とあらん限りの大声を張り上げるとそれと同時に目からとめどなく涙が溢れだしてきた。

嗚咽を吐き、顔をクシャクシャに歪めながら風呂場から出ると泣き止むまでしばらくの間その場で身を屈めなければならなかった。

そして落ち着いてから顔を上げ深呼吸をしバスタオルで体を拭いた。

そろそろすべてが潮時だと思った。

潮時だった。

## 退屈な日、アッシュトレイ

---

週末の土曜午前3時過ぎ。俺は台所でせっせと腕にタバコの火を押し付けていた。それ以外にする事が何もない週末だった。

開け放った窓から酔っ払い達の威勢のいい叫び声が聞こえてきた。若い連中が楽しく騒いでいるらしかった。

羨ましいなと思った反面憎らしくなったので窓のカーテンを捲くりベランダへ出て「うるせーぞ 静かにしろや！ぶっ殺すぞ！」と怒鳴ってやった。

するとそれに腹を立てたのか俺に降りて来いとわめいている。

俺は台所に戻りフライパンを手にして部屋を出た。エレベーターの中は冷たく静かで別世界にいるようだった。扉が開け放たれると、外の気だるい暑さが襲ってきた。

マンションのドアを勢いよく開け始めに目にした男のほうへ駆け出した。

それからそいつの頭をフライパンで叩いた。二発、三発。三発目はそいつが頭を庇うのでその腕に邪魔された。

女は悲鳴をあげていた。それに気づいた瞬間に背中を蹴飛ばされ路上に倒れた。目に二人ほど男が映った。一人は自転車に乗っていた。起き上がりがてらに俺へ覆いかぶさろうとしているやつのかめかみをフライパンの横で叩いた。

男は悲鳴をあげた。

女が泣きわめいている。もう一人の男は自転車に乗って何処かへ行った。たぶん交番にだ。

俺は倒れている連中をひたすら蹴りまくった。路上に流れる血はどんどん増えてきていた。

視界の端に女が映ったので俺は振り返り女のほうへ歩み寄った。友達になってくれないかと口にしようとしたら勢いよく逃げていった。

俺達は取り残された。

連中は調子に乗りすぎたし俺もまた調子に乗りすぎた。

連中は愚か者で俺もまた愚か者だった。

誰にもそれをどうする事ができなかった。

## 俺の青

---

朝の病室には陰気臭い薬品の匂いと新鮮な生まれたての空気が入り混じって立ち込めている。白衣の天使が可愛い死神に見えた。タイプじゃない子とおばちゃんを除いての話だ。

病院のベッドに横になっているのは俺の先輩だ。  
偉大なる大先輩。

小さい頃からめちゃくちゃな奴だったと話を聞いた事がある。中学で知り合ったが、何度も意味もなくそいつとそいつの仲間にボコボコにされたのを憶えている。最低最悪な男だ。

中学で離れ離れになって23歳の時に就いた鉄筋屋の仕事でまた一緒になった。

そしてそいつは今病院のベッドに横になってむせび泣いている。

余命六ヶ月。何の病気なのか聞いたけど今はまったく憶えていない。

余命六ヶ月。最高だ。あと六ヶ月もすればこのクソみたいな世界とお別れできるなんて本当に最高だ。めちゃくちゃにやりたい放題の人生を25年間生きて、そして後六ヶ月で死ぬのか。

俺はだんだんこいつが憎たらしく感じてきた。神様は不平等だ。こいつのせいで学生時代の何年間かは顔も上に上げられないくらい陰湿な時を過ごした。

クラスの仲間もそうだ。このクソ野郎共が学校を牛耳って地獄に変えていたんだ。それからもずっとやりたい放題の人生を生きて、それでこいつはもうバイバイなんだと。

俺はこれから後どれくらい生きるっていうんだ。老後なんてクソだ。考えたくもない。クソみたいな仕事をして命と精神をすり減らし体が年老いて節々が痛くなる。

立ち上がるのも一苦労だろう。可愛い女の子も抱けなくなって愛しい恋人も老いぼれてしまう。ポコチンも萎れちゃって情けない姿だ。美しい思い出だけが唯一の楽しみか。吐き気がしてきた。

突然、俺の偉大なる大先輩が泣きじゃくった顔をこっちに向け、そして俺の腕を強く握って言った。「死にたくない・・・もっと生きたい・・・何で俺が・・・うっうっ・・・。」「お前は俺の分まで生きてくれ・・・うっ・・・うっ・・・。」

あまりにその嘆願するような泣きっ面が間抜けでむかついたので、その顔面を左の拳で思いっきり殴った。そしてその後顔を背けた後頭部に蹴りを入れてやった。

奴は一瞬何が起こったのかわからなくて、驚いた表情になった。そしてキョトンとこっちを見てる。ヒクヒクとしゃくりながら。腹が立つ顔だ。

それから俺はこのバカ野郎に、これから先生きていく事がどれだけ辛い事なのか話してやった。おそらく1時間くらいかな。

それからそいつが取り残されていく俺よりもどれだけ幸せなのかって事も話してやった。

命の期限が明白にわかっているって事は、これからする事一つ一つに全身全霊で取り組めるって事だ。

いじけて泣いて過ごす一秒一秒も尊い時間だし、看護師とする何気ない会話も心から楽しめるだろう。例えそれがどんなにくだらない話で、息の臭いおばちゃん看護師相手でもだ。

お前はどれだけ最高なんだ？お前の見ている空の青と俺の見ている空の青が一緒だと思うか？お前の見ている空の青は澄み切っていて愛おしくてかけがえの無い青だけど俺の青はただの青なんだ。

ただの青なんだよ。

ここでもむかついてきたので一発殴ってやった。止めるなんて抜かしやがって本当にむかつく奴だ。でも殴りたい奴を自由に殴れるなんてすこぶる気持ちがいいもんだ。きっと昔こいつが俺を殴っていた時はこんな気持ちだったんだろうな。

こいつの一秒一秒はかけがえのない愛しい一秒だ。それはこいつ自身が感じられているだろう。だけど俺の一秒一秒はどうだ。俺もこいつみたいに感じたい。

泣けるくらいに今を、一秒一秒を愛おしく感じてみたい。いつ死ぬかもわからない、これから先ダラダラと長い人生が待っていて、やりたくもない仕事をダラダラと続けていだけだろう。未来で待っているのは小便垂れた惨めで年老いた自分だ。とんだ間抜けだな。

怯えた目をして俺を見つめながら「もう帰ってくれ...」と奴は言った。

俺は帰らなかった。タバコを吸って奴の顔に吹きかけたり殴る振りをして遊んだ。看護師を呼ぶぞと脅されたのもう帰るからと慰めてあげた。この病室に来る前までは自分はいい奴だと思ってたけど、このバカと過ごして案外そうでもない事がわかった。

俺も結局はこいつと同じなんだ。ただのクソって事さ。

帰る間際にもうこれから必要なくなるだろうお金を、もし貯金とやらがあるのなら俺にしてくれないかと聞いてみたがお前にはやらないとキッパリ断られた。ケチなやつだ。どうせ地獄では貯金なんて使えないだろうによ。

若くして期限付きの死という幸せを手に入れた奴と、これから先クソつまらない長い労働と、金の悩みや小便たれた老人の時代を味わう奴。でもまあ案外後者も悪くないかもしれないな。

また遊びに来るからと言って病室から出て現場へ向かった。今日の飲み代を稼ぐ為に。

そしてしみったれた未来に僅かながらの金を残すべく命を削る為に。